

岡先生の思い出

宮城徳也

二千年三月三日、岡道男先生ご逝去の報に接した。十年来兄事している山澤先輩からの電話であった。先生が監修者となっておられる仕事を滞らせて、途方に暮れていた私は茫然自失の思いで、喪服を買い求め、居住地の関東から大阪へ向かった。京大西洋古典研究室出身の全ての人が、かけがえの無い方と思っている先生のご逝去を、私一人の不幸のように嘆くのは僭越なことと思われるので、その時の衝撃に関しては語らないことにする。先生がどれほど偉い学者だったか、人間としてどんなにすばらしい人であったかも、諸先輩や友人たちが語るであろうから、私はまぎれもなく自分だけが体験した先生との出会いをここで追想したい。

私は東京の私立大学の文学部で学び、大学院修士課程までその大学に在籍した。しかし自分たちと根を異にする西洋の学問を学ぶ閉塞感を覚え、東京という大都市になじめずに、深い挫折感に苦しんでいた私は、どんな形でも良いから出口を求めていた。正直に言えば、西洋古典でなくても良かったし、京都を選ぶ必然性も無かった。岡先生のこと、偉い古典学者という以外には、良くは存じ上げなかった。

東夷にとって外国のような京都の町に魅かれたこともあるが、西洋古典の大学院入試の面接で岡先生にお会いしたことは、はっきり自分の人生の転機だったと思っている。白晳長身で、鼻梁高く、深い思索をたたえた面差しの先生は、それまで漠然と思い描いていながら、一度も会うことの無かった「大学教授」のイメージにピッタリの方だった。しかも、外見ばかりでなく、中身は凡百の教授たちを遥かに凌駕する、本当の学者だった。さらに、長いだけで何の取り柄も無い提出論文を隅から隅まで読んで下さり、厳しいが懇切丁寧なご助言を下された。先生との出会いを天が与えてくれたのに、これを無にしたら自分の人生を自ら捨ててしまうように思われた。たとえ不合格になっても、家賃一万円の下宿を探して、アルバイトをしながら聴講生として京都に残ろうと思った。

天井の高い、後で知ったところによれば、過去の偉大な学者たちの研究室だ

った部屋で面接は行なわれた。大きな木の扉を開けると、先生はそこにいらした。「いらした」のは主任教授の面接ならあたりまえのことだろうが、そこにいたのが岡先生でなかったら、私は京都に居着かなかったかも知れない。先生はご自分には厳しく、他人にはやさしかったが、無意味に人をおだてるようなことはなさらなかった。どう言えば学生の勉学に資することになるのかをいつも考えておられた。ご指摘は細部に及んだが、ご助言は大局を見据え、有意の方向をお示し下さった。京大での授業も示唆に富んだ、一言半句聞き逃すまいと思わせるものだった。

先生がホメロス、ギリシア悲劇、ウェルギリウスという古典研究の王道を歩んでおられるのに、私はいつも「はずれ」狙いに終始した。しかし、正統そのものである岡先生の教えを受けられるという安心感があってこそ、私は先生とは違う方向を模索した。岡先生と同じには絶対になれないが、先生がなさらなかったことを懸命に学んでいくことで、先生の学恩を私なりに活かすことは十分にできると考えた。これが当時も今も変わらぬ私の基本姿勢になった。たとえ「はずれ」の研究でも、示唆の源泉は全て先生にあって、古典の勉強を続ける限りは、永遠に岡先生のご指導が受けられるように思えるからだ。

関西を離れ、再び東京にもどった私が、京都を拠点に暮らすことは二度とないだろう。しかし、京大に学んだおかげで、出会うことができた京阪神の人たちからはこれからも教えを受け続けることができると思う。岡先生のおかげで知り合えた人々との交流や、京都で暮らした思い出を胸に、私自身は母校の私立大学を根拠地にして自分なりの学問を形成し、岡先生から学んだことを少しずつでも伝えていきたい。あるいは個々の事項に関しては、私の能力不足で伝えきれないことがあったとしても、学究としての人生を生き抜いた、岡道男という古典学者がいたのだ、ということだけは言い続けていきたいと思う。